

## 真の羊飼いに導かれて

昨年末に、「本のひろば」というキリスト教読書案内のパンフレットに「この3冊！」というテーマで書評を書きました。日本聖書協会の引合せで、どういうテーマを選んでも良いと言われたので、「詩と詩篇に親しむなら」この3冊、という紹介となりました。最初の一冊は、岩波ジュニア新書に入っていた茨木のり子の「詩のころを読む」をあげました。彼女が日本の詩の特徴について語った箇所をブリッジにして残り2冊の詩篇に関する本に続けました。茨木のり子はこういうのです。「つづまるところ、詩歌は、一人の人間の喜怒哀楽の表出にすぎないと思うのですが」とことわって、日本の詩歌は「哀」において数多くの傑作を生み、「喜」や「楽」にも見るべきものがあるが、「怒」の部門が非常に弱く、外国の詩にくらべるとそこがアキレス腱と思われる、と分析するのですね。これはわたしたちの国民性を考えると、さもありなんという感じですね。そしてこの「怒」の部分に大胆に踏み込んでいるために、わたしたちに戸惑いをすら与えるのが旧約聖書におさめられた詩編、とくに激しい怒りや、復讐を求める詩篇です。皆さんの中にも詩篇を読んでいて、その表現の過激さに驚いた人もいないでしょうか。有名なところでは「娘バビロンよ、破壊者よ。いかに幸いなことか。お前がわたしたちにした仕打ちを仕返す者、お前の幼子を捕らえて岩に叩きつける者は」というような詩篇ですね。詩篇は全体で150篇あり、5巻に分かれています。全体として嘆きから賛美へという大きな編集上の流れをもっています。わたしはこのあと「詩篇で祈る」というアメリカの旧約学者の本を紹介するのですが、この学者は「青天の霹靂のようにおとずれる人生の不条理に打ちのめされる時、わたしたち

は言葉を失います」が、そこに語る言葉を与えてくれるのが詩編だということです。そして「我々の経験を詩編に触れさせる」ことを提唱します。人生におとずれる混沌や無秩序、逆境における方向喪失の現実、生々しい人間の現実のなかで経験した事柄を「巧みな言葉と情熱をもって聖なる方に敢えて語りかける声」を詩編が与えてくれるからということです。これはそのとおりだと思います。ひとつひとつの詩の背後に、その詩を己の祈りとしてきた長い人の列がある。わたしたちもさまざまな経験をしたとき、その詩を用いることでその並んだ列の最後尾に立つと言って良い。それがはっきりと現れるのが先ほど紹介したような復讐の詩篇なのです。なぜ聖書に、呪いを相手にぶつけ、報復を願う言葉をもつ詩があるのか。この重要な意義について、「深い悲しみ、嘆き、報復への願いこそは、人が最も神を必要とし、最も切実に神に祈る時」であり、「そうした体験を信仰から切り離し、信仰の詩から取り除いてしまうとしたら、その信仰は全存在的なものではなくなる」という指摘があります。先ほど上げた復讐の詩篇はイスラエル民族が実際に歴史のなかで味わってきた数多くの戦争、戦闘、国の滅びの体験のなかから生まれたものであり。こうした詩篇を用いる人は、それによって自分に代わって嘆く声を得ているのであり、家族を失ったり、自分自身が傷つけられた相手を呪い、神に正義を求める叫びをあげることで一種のグリーフワーク、嘆く仕事、喪の仕事をしているということです。あたっていると思います。こういう詩篇を用いること自体に抵抗のあるわたしたちですが、書評の最後にわたしは「それにしても、軋みのます国際情勢や気候変動による災害の多発する現状を思うと、伝統的なキリスト教の枠におさまりにきれない深い悲しみ、嘆き、とくに報復の詩編をわたしたちの信仰生活に取り入れることが牧会者にとって喫緊の課

題であると思われてなりません」と書きました。先週、ロシアがウクライナに侵攻しましたが、こういう状況によって東アジアの地政学的な戦後秩序もまた今後揺らいでいき、コロナとは違った意味で、またわたしたちの考える日常というものが「非日常」に置き換えられることもあり得る。そういう状況下で、また詩篇を読み、身の内に蓄えることも重要な意味を持つてくるのではないかと思います。

さて前置きがずいぶん長くなってしまいましたが、今朝とりあげる詩篇 23 篇は、過酷な歴史のなかで生き抜いてきたイスラエルの民が神に寄せる信頼が宝石のように結晶している。宝のような詩篇です。この詩では神さまと自分たちの関わりが、羊飼いと羊に譬えられます。そして宣言する。主は羊飼いで、わたしには何も欠けることがない。主が「わたしの」羊飼いであるゆえ、わたしには何も不足するものがない、欠けることなど有り得ない。この確信は次の連に入りますと「わたしは災いを恐れませんが」と告白されます。「たとえ死の陰の谷を歩むことがあろうとも」「あなたがともに居てくださるから、あなたの杖、あなたの鞭、それがわたしを力づける」のだから、恐れないと言い放つ。

この「死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない」という表現は力強く、この詩篇がわたしたちに愛される大きな理由でしょう。それはわたしたちの人生にはわたしたちを具体的に脅かす様々な死の陰があるからに違いありません。イスラエルの場合、ここには出エジプトの出来事が背景にあると読む者がいます。あのとき、主はモーセを用いて、彼らをエジプトという死の陰から導き出し、海を割って渡らせ、さらに荒れ野を行かせました。その間、天から降るパン＝マナや、うずらや、岩から湧き出る水が彼らを養いました。荒れ野の中にあっても、

彼らは飢えることなく旅を続けることが出来たのです。何も欠けることがなかったのです。そして憩いの水際へ。乳と蜜の流れる約束の地＝カナンへと導いてゆかれました。後世、荒れ野の40年という言葉が残されましたように、この旅は眩く民のゆえに苦しいものとなりました。主に信頼せず、試み続ける民を、羊飼いである主は忍耐づよく導いて行かれたのです。40年というときを通して、羊の背に鞭と杖をある時は振り下ろすことを通して、眩く、バラバラだった民を、神の民、聖なる国民へと整えようとされた。そういう民族の歴史が、救いの旅が、この詩篇から浮かび上がってきます。この民族の救いの記憶の中に、わたしたち一人一人もみずからを重ね合わせる事が許されている。わたしたちはそこから信頼を学ぶことができます。羊飼いは、羊から目を離すことも、その傍から離れることもない。イスラエルを守る方は眠ることも、まどろむこともない。ここに告白されているのは絶対的な信頼です。そして、この信頼が何を指しているかということ、もう少し踏み込んで言いますと、それは神の摂理に対する信仰の告白です。摂理とは聞きなれない言葉かもしれませんが、しかし、これこそは聖書がわたしたちに教えるもっとも重要な教えのエッセンスとも言うべきものです。信頼の実体と言いましょか、核となる部分を書いて表すと摂理なのです。それは神さまが、お造りになったものに注がれる慈しみと憐れみのなかで、かならず必要なものを備えてくださるといふ配慮と保護を示す言葉です。羊飼いが、羊から離れないように、神はわたしたちを見守っておられる。そして必要なものを与えてくださる。荒れ野の中で水を、青草の原にある食物を与えて下さる。敵に脅かされるときも、この方の杖がわたし達を守り、わたしたちが道を逸れていこうとするときには、この方の鞭がわたしたちを正しい道へと導き返すた

めに振るわれるのです。こうして羊に豊かに命を得させるために、羊飼いはあらゆる配慮を惜しまれることはありません。そして、憩いの水際へ、わたしたちの命の充ちる方向へと群れを導いてゆかれるのです。このことを信頼して歩むことが出来るならばどれほど安心でしょうか。羊であるわたしたちがあれこれと心を乱すのではなく、すべてを支配し、整えられる創造主である主の御手にお委ねして安んじておられる。ここに聖書の語る究極の平安の根拠があるのです。この詩篇はそこにふれています。わたしは摂理という言葉や、主の恵みの御支配という言葉に言い換え、祝祷のなかに忍ばせています。それは命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追うと、この詩の結びにも歌われるように、主の配慮と保護を信じぬく信仰を言い表すものでもあります。この「恵みと慈しみがいつもわたしを追う」という表現も素晴らしいですね。わたしたちはいつも何かに追いかけてられているような気がします。借金取りから、というのはあまりないでしょうが。仕事に追われ、家事育児に追われ、生活に追われ、病と追いかけてこし、ついに死に追いつかれて陰府に降る。そういう追いかけて死んだらおしまいという虚無的な気配をどこかに持っているのではないか。しかし、この詩篇はそうではない。神とともに生きる者にとっては、神の恵みと慈しみが、どんなときにもわたしたちを追いかけてくるというのです。人生の暗い時にも、困難な時にも、主の恵みの御支配が、わたしたちを覆っていることを思い起こさせ、勇気と励ましを与えます。実に神の恵みと慈しみはどこにあらうと離れ去ることはない。それはわたしたちの行くところに、驚くべき表現ですが、追ってくるというのです。わたしたちの神は場所につくのではなく、人につくのです。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主、といわれるように、わたしたち

の神であることを明らかにされている。天から降り、陰府にまで降り、三日目に復活なさせて死の支配を打ち破られた方を、さらにわたしたちは真の救い主、羊のために命を捨てる真の羊飼いと知っている。いや、この方に知られ、結ばれている者たちです。ですからなおさら、わたしたちは「命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う」ということができます。そこが異教の地であろうと、獄中であろうと、被災地であろうと主の恵みの御支配から洩れた場所など存在しない。あなたが見放されることはない。その神の真実をさまざまな試練の中でイスラエルは体験してきた。民族の苦難の中で、救いの手を差し伸べられた神の記憶を呼び覚ますことで、将来の救いをも確信し、今を生き抜く力を与えられていったのです。神を主とする者に、羊飼いとする者に、絶望はない。この詩篇は、「主の家にわたしは帰り、生涯そこに留まるであろう」と結ばれます。帰るべき場所に帰ることの許されている静かな喜びがここにあります。詩篇 23 篇を、人生のさまざまな場面でわたしの祈りとすることで、わたしたちも主と共なる平安に与りたいと願います。

お祈りいたします。